

泰山府君たいざふぶく〔桜の名なり。双林寺さうりんじのうへなる山東漸寺とうざんの庭にあり。桜町成範卿花さくらまちなりのおりきやうの盛を天帝てんていへ祈り給ひしより、毎木に勝れて盛久しき桜をかくの如き銘じたるなり。都て此ほとりは洛東らくとうの佳境にして桜多し、知恩院ちおんゐんの樺桜は変色にして世に名高し〕

花歌とてよめる

新古今

花も又わかれん春は思ひ出よさき散たびのこゝろづくしを

殷富門院太輔

花の香の虚空にひろし東山ひがしやま

正秀

山王社さんわうのやしう

〔祇園鳥居ぎをんとりゐの西にあり、傍に三猿の像を安置す。此社はむかし山門より内裏へ強訴の時、神輿を振て捨置し

なり、故に捨山王すてといふ。事は平家物語へいけものがたりに見へたり〕

日吉の神輿かんしんゐん感神院におはしましける時、月あかく侍けるをよみ侍る、

玉葉

神代いかに都の月に旅ねして思ひやいづる志賀しがの古郷

前大僧正忠源

疫伏社やくふせのやしう

〔祇園西門ぎをんの外、北の町にあり。祭る所疫神、諺曰、浄蔵貴所を祭るなりとぞ。又云、此所は文学もんがく法師はふしぎやう行斎

して平家を呪咀せし地なりといふ〕

蓮華院旧蹟れんげ びんきやう せき 「今の東大谷のまへ、祇園女御の旧跡といふほとりならんか。其地前編に見へたり」

盛衰記云、感神院行幸の御時

祇園ぎをんの西大門の大路の小家に女のあやしきが御幸を拜し奉る、帝御目みかどに懸る御事有ければ、還御の後かの女を宮中に召されて、つねに玉体に近き進らせけり。祇園社ぎをんやしろの巽に当つて御所を造て居られたり。公卿殿上人くぎやうでんしやうびと重きに思ひ奉て祇園女御ぎをんによことぞ申ける。(中略)今の蓮華院れんげ びんと申は、彼祇園女御ぎをんによこの御所の跡なる。

〔東鑑あづまかぎ云、鳥羽院とばのゐんの御寵愛祇園女御ぎをんによこは源仲宗みなもとのなかむねが妻なり。続世継云、白河院御代しらかはのゐんみよに世人祇園女御ぎをんによこと申は、加茂かもの社司重助が女にして、加茂女御かもによことも申なりとぞ〕

鷺尾わしのを 「いにしへ鷺尾中納言隆良卿たかよしの山荘、今の高台寺かうだいじの地にありしなり。かるがゆへに高台寺かうだいじの山号を鷺峰山じゆほうといふ。又当山を岩清不動山ふじどうといふは、中頃細川満元ほそかはみつもとの寄進にて、村菴彦長老そんあんげんちやうらうの建給ひし岩栖院がんせいゐんによるなり。応仁の兵火に滅ぶ。岩栖院がんせいの号は今南禅寺なんぜんじの内につす」

文永元年春鷺の花忍びて見侍し時

続 古 なつかしき香にこそ匂へ袖ふれし代々の昔の花の下風 太上 天皇

雲居寺旧蹟うんこじ〔拾芥抄しふかいせう云、祇園ぎえんの南、花園はなぞのの向といふ。按ずるに、今高台寺下壇かうだいじの地ならん。花園は双林寺さうりんじをいふ、

雲居寺うんこじは応仁おうにんに亡ぶ〕

〔著聞集云、祭主神祇伯親定しんぎはくちかきただ、伊勢国いせのくにいはでといふ所に堂を建て、胆西上人たんせいを請じて供養をとげけり。其布施うんこにて雲居寺うんこじをば造畢せられける〕

雲居寺うんこじの結縁経の後宴に歌合し侍るに、九月盡のこゝろをよみ侍ける、

千載 唐錦ぬさにたちもてゆく秋もけふや手向の山路こゆらん 胆西上人

胆西上人たんせい雲居寺うんこじの極楽堂ごくらくどうに堀川右大臣ほりかはうまいりて歌よみ侍けるによめる、

同 いさぎよき池に影こそ通ひぬれしづみやせんと思ふ我身を 顕 仲

夫木 すむ月をみだのみかほに詠れば雲るが寺も名のみなりけり 式部太夫定業

天満宮てんまんぐう〔高台寺かうだいじの鎮守なり、初め上壇の地じにあり、近年こゝに遷す。御自画綱敷ごじぐわつなじきの相なり。太閤北政所高台院殿たいかふきたまんどころかうだいゐんでんの

御寄附なり。狩野永納かのの、えいなふが画式に出たり〕